

“Madonna of the Prairie” の実像

—— Edna Ferber の *Cimarron* における女性主人公の分析 ——

西 岡 かれん

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 *Cimarron* (1930) は、出版当初、アメリカの西部開拓を支えた “Madonna of the Prairie” の物語として受容され、経済的な成功をおさめた。しかし、作者 Edna Ferber 自身が *Cimarron* は “hard and ruthless purpose” のもとで書かれたと語るように、実はアメリカのフロンティアにまつわる神話への皮肉に満ちた内容となっていることは、ヒロイン Sabra の表象からも読み取れる。自らとは異質な存在へ愛や共感を寄せる女性キャラクターを好意的な視線で描くことが多い Ferber としては例外的に、Sabra に対しては一定の距離をおき、批判的に描いているとも言われる。本論では、Ferber が複雑な思いを持ちながらも丁寧に描き出した Sabra を、夫の不在に伴う役割の変化の中で得たものと失ったもの、演技といった観点に着目して分析し “Madonna of the Prairie” の実像を明らかにしたい。

キーワード：アメリカ文学、フロンティア、女性キャラクター

1. はじめに

Cimarron は Edna Ferber が多くの作品を発表し作家としてのキャリアが軌道に乗っていた 1930 年に発表され、好意的な反響¹⁾を呼ぶとともに多くの読者を獲得した。1931 年に公開された Wesley Ruggles 監督による映画版 *Cimarron* は、西部劇のジャンルに分類される映画としては初のアカデミー賞作品賞を受賞し、小説・映画ともにアメリカのフロンティア神話を扱う代表的な作品としての地位を確立した。

Ferber はこうした成功を受け、以下のような言葉を残している。

Cimarron had been written with a hard and ruthless purpose. It was, and is, a malevolent picture of what is known as American womanhood and American sentimentality. It contains

paragraphs and even chapters of satire, and, I am afraid, bitterness, but I doubt that more than a dozen people even knew this. All the critics and the hundreds of thousands of readers took *Cimarron* as a colorful romantic Western American novel. (Ferber, *Peculiar Treasure*, 339)

Cimarron の主人公 Sabra 像をめぐるのは、出版当初と近年の批評家たちで異なった見方がされている。出版当初の受容のされ方と Ferber の認識の乖離に着目し、Phelps は “Many reviewers said that ... the *Cimarron* was a straight romantic story, with the wife [Sabra] held up as the ‘purest type of American womanhood’; if they could only have known how Edna Ferber hated her!” (363) と論じている²⁾。女性を主人公とした小説を多く書いてきた Ferber は、女性の登場人物に自分自身を投影³⁾させることも多く、人種・ジェンダー・階級といった社会的要素により抑圧を受けながらも、他者に寄り添

う共感性をもつ人物描写を得意としてきたため、Smyth が “an unabashed white racist” (121) とし、McGraw が “Marshaling her paternalism” (79) と容赦なく批判する父権的な人種差別主義者や物質主義者としての側面を持つ Sabra を描く *Cimarron* では例外的なアプローチをとっていると言える。

Sabra がフロンティア開拓を支えたアメリカ人女性の鏡とみられた出版当初とは打って変わり、近年の批評においては、Phelps, Smyth や McGraw のように Ferber は Sabra に対して否定的に描いている、というものが主流になっているが、実際のところ Sabra の人物描写は複雑で、彼女の役割や周囲とのパワーバランスは彼女が自覚できる範囲を超えて、物語の進行と共に変化していく。本論では、これまで着目されてこなかった夫の不在に起因する Sabra の役割の変化や演技といった観点から Sabra 像を分析し、Ferber が批判的な視線と共感を併せ持ちながらリアルに描き出した “Madonna of the Prairie” の正体を明らかにしたい。

2. “Madonna of the Prairie” としての Sabra

Campbell や Smyth などが論じているように、Sabra は長く “Madonna of the Prairie” として受容されてきた。“Madonna of the Prairie” とは、“a popular icon of the times pressed into service as an agent of American identity formation” (Campbell 26) であり “sturdy helpmate and civilizer of the frontier” (Myres 2) とされ、西部開拓に向かう夫に伴い移住し、家族を支えながら西部を文明化していく役割を担った女性たちのことを指す。“Madonna of the Prairie” のイメージは、フロンティアの拡大を推奨し、それに参加した人々の物語を美化し、彼らを建国神話の構成要員として定着させた。Campbell によれば 1890 年代には、New Woman の概念にインスパイアされ、“holding a gun in one hand and a child in the other” (Campbell 27) といった逞しさを兼ね添えた “Madonna of the Prairie” が登場し始める。Sabra はこの系譜の女性であり、不在の夫の代わりに家父長的な役割を果たすフェミニスト的な要素も持ち合わせていた。Smyth は “Sabra does wield domestic and civic power beyond

anything in the emerging prairie-Madonna literature.” (119) と述べている。

Zink が “On the surface” という但し書きを添えて以下のように述べている通り、*Cimarron* はヒロインの Sabra が家庭に閉じ込められたナイーブな若い女性から、夫の新聞社の経営を成功させ、政治家になり上がるまでの成功物語として読むことができる。

On the surface, Sabra evolves from the traditional True Woman whose primary sphere of influence is her home and family to the modern New Woman whose influence extends beyond the walls of the home and into the “public” world of men and politics. In this way, *Cimarron* might be read as a triumphant feminist novel. (Zink 68)

不在がちな夫の代わりに新聞社を経営し、子どもたちの生活を支えながら夫の帰りを待ち続ける Sabra は、その健気な一途さが美德として持ち上げられ、“Madonna of the Prairie” のモデルとみなされた。映画版ではそういった要素が一層強調され⁴⁾、彼女が保守的・権威的な人種差別主義者の側面を持っていることは重要視されてこなかった。

しかし、近年読み解かれていくように、そして Ferber 自身が語っているように、Ferber は Sabra を描く際に、建国神話を美化するのではなく、逆にそれを皮肉る意図を持っており、その根拠として植民地主義的、父権的でかつ物質主義者の Sabra の発言や心の声が繰り返し描かれる。南部の保守的な家庭に育った彼女にとって、家族に仕える黒人の少年 Isaiah は “belonged to Sabra, body and soul, as completely as though the Civil War had never been” (91) であるし、彼女は “hated Indians and all their ways” (158) であることをオープンにして憚らない。そんな Sabra のことを Zink は “embodiment of institutionalized racism” (70) と呼んでいる。

Ferber が Sabra の人種差別的な側面をことさら強調して描いてみせたのは、“Madonna of the Prairie” がカウボーイなどのフロンティア・ヒーローと共にもてはやされたアメリカ西部の神話は、

実情としては白人がネイティブ・アメリカンたちを迫害し、彼らの土地を奪うものであったことを意識していたからであろう。*Cimarron*における人種の描写に関しては、後の章で述べるように Sabra の夫で白人として通用している Yancey が、実はネイティブ・アメリカンの血を引いているのではないかと解釈できる場面⁵⁾もあり、小説の中で、Sabra が夫に代わって財力や権力を得ていく構図は、白人と、白人によって虐げられ、周縁に追いやられていくネイティブ・アメリカンの関係性を象徴してもいる。Zink が “reading *Cimarron* primarily as a triumphant feminist novel misses the colonialism that taints Sabra’s New Womanhood.” (68) と述べるように、Ferber は神話化されていた “Madonna of the Prairie” を、白人としての権威を振りかざし、ネイティブ・アメリカンたちを卑小な存在として軽んじる女性として描き直している。しかし Ferber は同時に、未開の地で生きのびていくために、権威的にならざるを得なかった、という Sabra 側のやむなき事情や、彼女の心の動きを仔細に描き、Sabra への共感も誘う。こうした多面的な描写が、出版当初と現在とで異なる Sabra への解釈を生んだと考えられる。次章では、これまでは夫の不在を契機として社会的な成功を得た女性として捉えられてきた Sabra が得たものと同時に失ったものに着目し、これまでに読まれてきたような “Madonna of the Prairie” 神話を支える家族思いの健気な女性としてでも、父権的な人種差別主義者としてでもない新たな Sabra 像について掘り下げていきたい。

3. 夫の不在に起因する Sabra の役割の変化

Sabra の表象における特徴の一つは、彼女の役割が物語を通して段階的に変化していくところであろう。初めはナイーブな若い妻だった Sabra は、夫の不在をきっかけに商才を発揮するようになり、財力を得て成り上がっていく。ここで注目したいのは、Sabra ははじめから金銭的成功や社会的地位を得ることを望んでいるわけではなく、実質的なシングルマザーとして子どもを育てるため、必要に迫られて無自覚なうちに力を得ていくという

ところである。

生まれ育った Kansas 州 Wichita から Oklahoma 州の未開の町 Osage に越してきたばかりの Sabra は、粗野な町の雰囲気になんとも耐えきれず “…Oh, Yancey—please—please—I don’t want to be a pioneer woman…” (96) と夫に泣きつく。しかし、20 年後には自分の娘からも “frontier gal” (284) と呼ばれ、有名な彫刻家がフロンティア神話を作品として残すために本物のフロンティア・ウーマンである彼女の話の聞きにくさというエピソードまで語られるように、彼女はコミュニティの中で “Madonna of the Prairie” としての役割を確立している。

若く無知な Sabra と、情熱的で力強く、人を惹きつける魅力のある Yancey の関係性に初めて異変が訪れるのは、西部へ移動中のある日に Yancey が鹿狩りに行ったまましばらく帰ってこなくなってしまうシーンである。このシーンのはじめでは、Sabra は “looked very wan and school-girlish in her prim gray dress and with her hair in a braid tied with a bright red ribbon” (58) と描写され、イノセントな様子が強調される。夫不在のなか、黒人の子守である Isaiah と遊ばせていたはずの息子 Cim の姿が見えなくなり半狂乱になる Sabra だが、Cim は見知らぬ男たちの一行に保護されていた。男たちとの対話を終え、無事 Cim を引き渡された Sabra は、彼らに鹿肉を贈られる。その後鹿を獲得できずに帰ってきた Yancey に対して彼女は “for the first time since her marriage, felt superior to him” (59) と感じる。これは Sabra が夫のいない場で目立った活躍をする最初の場面として印象深い。

自信をつけた Sabra は、Yancey と街を歩いているときに、ならずものの男たちと行き当たり物騒な場面に遭遇すると、啖呵を切って Yancey を庇おうとするが、このように彼女が表舞台で人から注目を浴びることや、二人の関係性において彼女の方が優勢になることを彼は快く思わず、 “This time to-morrow it’ll be all over the whole Southwest, from Mexico to Arkansas, that Yancey Cravat hid behind a woman’s petticoat” (77) と文句を言う。この段階では Yancey が Sabra を守る側

にいる、という役割分担を二人ともが認識し、受け入れている。しかし、“Yancey, still her passionate lover, had always treated her tenderly, as a charming little fool, and this role, she had meekly, even gratefully—accepted.” (88) と書かれるような関係性は長続きせず、放浪癖を持つ彼は、家を開けるようになり、Sabra は “take more and more of a hand in the assembling of the paper’s intimate weekly items” (132) と書かれるように Yancey の代わりに仕事をする時間が増え “emerging slowly from her role of charming little fool” (132) となる。

新聞社の経営を成功させるのと同時に婦人会を発足するなど、Sabra は町のコミュニティの中での存在感も増していくが、誰よりも彼女自身がそういった事態に対し戸惑いを隠せない様子は以下から見て取れる。

All this was bewildering to Sabra. But she did a man’s job with the paper, often against frightening odds, for Yancey was frequently absent now, and she had no one but the wavering Jesse Rickey to consult. There were times when he too, failed her. (173)

Zink が “Yancey’s ineptness makes room for Sabra to work in the public realm, outside of the typical sphere of domestic woman’s work” (82) と述べるように、確かに Yancey の不在は、Sabra が力を増すきっかけとなるが、それは同時に、家庭空間における Sabra の不在というこれまであまり指摘されてこなかった別の作用をもたらす。Yancey が Alaska 州での金の採掘や、外国での戦争への志願兵としての参加などを理由に年単位で家を空けるようになる前は、Sabra は子供の教育に注力している様子が描かれ、息子の Cim だけでなく、使用人の Isaiah にも読み書き数学を教えていた。

Sabra, in time, taught him [Isaiah] to read, write, and figure. … Cim was beginning to learn the alphabet, and as Sabra bent over the child, Isaiah, too, would bring his little stool out of its corner. (92)

Isaiah に子供を預ける時にも彼に “many and detailed instructions from Sabra” (70) が課され、Sabra は常に家庭空間の支配権を保っていた。

しかし、Yancey の不在が長引き、公的な空間での役割による負担が増えるようになると、Sabra はネイティブ・アメリカンの女性を “general houseworker and helper” (171) として雇い、子供の世話を任せるようになる。その結果、息子は Sabra が雇っていたネイティブ・アメリカンの酋長の娘である Ruby との仲を深め、のちに Sabra の大反対を押し切ってこの女性と結婚することになる。

台所で親しげに Ruby と話す Cim が、ネイティブ・アメリカンの歌を歌い出すのを見た時、Sabra は驚き “Stop it!” と叫び “gesture of a tragedy queen” (239) とともに、Cim を台所から追い出してしまうほどの強い拒絶反応を示すが、彼らの影響を受け歩き方まで “story-book Injun” (239) のようになった Cim をはじめ、家庭の中のことはもはや彼女のコントロールの範疇にはない⁶⁾。Cim がネイティブ・アメリカンたちの儀式を見に出かけたまま家に戻ってこなかった夜、息子を心配して居留地まで彼を迎えにいった Sabra は、メスカル酒を飲んで眠りこんでいる Cim を見て “He is dead.” (255) と心の中で呟く。

夫の不在により社会的な地位を得た彼女は、世間体の上では、家庭での妻・母としての役割も保持し続けたが、実質的には母親としての力を失い、息子を象徴的に亡くしている。娘の Donna もまた、彼女を反面教師とし、母親とは心理的な距離を置いたまま成長する。

Yancey の出自がネイティブ・アメリカンである可能性があることから、息子 Cim が彼らに惹かれていくのは自然なことで捉えることもできるのだが、ここで重要なのは、妻や母のイメージが先行する “Madonna of the Prairie” であるはずの Sabra が、実は家庭内での立場を黒人やネイティブ・アメリカンの使用人らに取って代わられており、新聞社経営の成功やその後の上院議員当選といった出来事は、彼女自身が重きを置いたはずの家庭生活を犠牲にした上で成り立つものであったということだ。権威を手にいれなお孤独な彼女の

様子は以下の引用からも読み取れる。

Cim was nineteen, Donna fifteen. And now Sabra lived quite alone in the new house on Kihekah Street, except for a colored woman servant sent from Kansas. She ran the paper alone, as she wished it run. She ordered the house as she wished it. She very nearly run the town of Osage. She was a power in the Territory. And Yancey was gone, Cim was gone, Donna was gone. (242)

Cimarron は、これまで評されていたように価値観が真っ向から対立する夫婦のパワーバランスが、夫の不在を機に妻優勢に変化していく物語ではなく、夫の不在による妻の役割の変化が家庭の中に新たな不在の空間を生み出し、彼女が夫に取って代わったのと同様に、彼女自身が差別し、軽蔑していたネイティブ・アメリカンや黒人たちに、彼女が価値をおいてきた母親としての立場を取って代われ、最も大切にしていた子どもを奪われる、という複雑な構図を呈している。この構図は、当時の白人と有色人種の関係性に興味深い洞察を加えるだけでなく、片方の手に銃を、もう片方の手に子供を抱えるという社会と家庭への貢献を両立させる“Madonna of the Prairie”のイメージが現実と乖離していることも示唆し、現在にも通じる女性の生き方への問題提起ともなっている。

次章では演技という観点から、引き続き Sabra のキャラクター性を分析したい。

4. 自覚なき演者としての Sabra

小説を通し Yancey は優れた演技者として描かれる。彼は“those priceless gifts of the born orator, a vibrant and flexible voice, great sweetness and charm of manner, an hypnotic eye” (9) を持ち、娘 Donna には“Dad wouldn't let himself die in a list. He's too good an actor to be lost in a mob scene” (299) と言われるほど、常に演技的な態度をとる人物として描かれる。

彼の出自が噂されている通りネイティブ・アメ

リカンなのだとすれば、Yancey のこの性質は、彼が白人として passing (通用するように演技) する必要性に迫られていたことと切り離して考えることはできない。南部の良家出身である Sabra とは対照的に、小説の中で Yancey の過去は一切明かされないため、彼の過剰な演技性は、彼が出自や過去を隠していることと関連づけて考えるのが自然である。

そう考えると、Isaiah が Yancey の服装や歩き方を真似しながら教会に現れる場面で、Sabra は“Her idol, her god, was being mocked” (113) であることに怒り狂うのだが、“himself a born actor” (113) である Yancey は Isaiah の行動に理解を示すと書かれるところからは、Yancey と Isaiah の間にある、差別を受ける有色人種として、生き延びるために演技をせざるを得ない者同士の共感を読み取ることができるかもしれない。

Yancey が演技をしていることに Sabra が気づく場面がある。妻子を連れ Osage に移動する際、保安官に呼び止められ、移動の目的を聞かれた Yancey は“He would talk as they talked. Be one of them.” (62) といった言動をみせており、Sabra は“knew then that Yancey was playing one of his roles” (62) と感じる。過去のことを詳しく聞かれては困る事情があるからなのか、Yancey は複数のキャラクターを使い分け、常にその場を凌ぎながら生きているようにも見える。

Zink は“Yancey's characterization invites us to read him as white and Indian. Ferber's presentation of Yancey's ambiguous racial origins argues for a definition of racial identity that is primarily performative and ultimately unstable” (68) と論じているが、演技の要素を白人である Sabra を関連付けてみると、演技をすることは passing という人種の文脈だけでは論じきれなくなる。小説の序盤では、Sabra は Yancey とは対照的に、演技をすることに対し消極的な態度を取る人物として描かれる。Yancey と Sabra の力関係がまだ逆転していないとき、Sabra は“player”ではなく、“onlooker”であった。西部の荒々しい町に夢中になっている Yancey とは裏腹に、彼女は“Somehow, she had yet no feeling that she, Sabra Cravat, was part of this

thing. She was an onlooker.” (71) と感じている。

そんな彼女が初めて演技をするのが、前章でも検討した Yancey が鹿狩りで不在になるシーンである。

She thanked them, using a little Southern charm and Southern drawl, which she often legitimately borrowed from the ancestral Venables for special occasion such as this.

“I’m ve’y grateful to you-all.” She now said. “You’ve been mighty kind. If you would just drop around to our camp I’m sure my husband would be delighted to meet you.” (58)

小説全体を通じて彼女が南部訛りで話すのはこの一箇所しかなく、明らかにここで彼女は普段とは異なるキャラクターを演じている。広大な荒野のただなかで、帰りが遅い夫を待ちながら見知らぬ男たちに愛想を振り撒いて鹿肉を獲得する彼女は、ある種危機的な状況を生き延びていくために演技をしているように見える。

前章で触れたように、彼女は不在の夫を待ち続けながら社会的成功を収めた強く健気な “frontier woman” として認知されるようになり、その役割を演じ切ることで社会的な地位を保つようになる。その過程で彼女は “borrowed Yancey’s vigorous and picturesque phraseology” (100) と書かれる通り、Yancey の演者としての素質を受け継いだかのような話術を披露するようになり、徐々に演者としての才能を開花させていく。以下の場面で、Yancey がかつて彼女に向けて語った言葉を内在化し、政治家になるための演説で再現してみせる Sabra は、自覚しない役者そのものである。

It had been so many years since she had heard this—it had sunk so deep into her consciousness—that perhaps she actually thought she had originated this speech. Certainly it was received with tremendous emotional response, copied throughout the Southwest, the Far West, the Mid-West states, and it won her the election and gained her fame that was nation wide. (300)

Sabra が演者へと変化したことは、夫婦の会話からも見て取れる。Yancey は Sabra との会話の中で頻繁に本や聖書から引用したセリフを発する。本来は自らの言葉による血の通った会話がなされるべき家庭内で、Yancey が演劇の中のセリフを引用して会話をしようとしていることから、Yancey が家庭の中で本音を話しづらいということや、出自や過去を妻である Sabra から隠し通さなければならなかったという事情が推察できる。

Sabra は Yancey のセリフの引用元となる本を読んでいないため、セリフのコンテキストを汲み取り損なってしまう。以下の場面で Yancey は荒野のような未開の西部の町にやってきた自身をジュリアス・シーザーになぞらえるが、Sabra の答えは要領を得ない。

“It’s horrible! It’s—and those men! Those dreadful men.”

“For my part, I had rather be the first man among these fellows than the second man in Rome.” Yancey struck an attitude.

Sabra looked at him dully. “Rome?”

“Plutarch, my sweet.” He kissed her; was gone with a great flirt of his coat tails. (66-67)

同様のことは、5年ぶりに帰宅した夫を責める Sabra に対し、Yancey がオデュッセイアの一節を引用する以下の場面でも起こる。

She shrugged herself free. Anger leaped within her. He was a stranger.

“Don’t touch me. You can’t come home like this—after years—after years—”

“Ah, Penelope!”

She stared. “Who?”

“Strange lady, surely to thee above all woman kind the Olympians have given a heart that cannot be softened. No other woman in the world would harden her heart to stand thus aloof from her husband, who after travail and sore had come to her—to his own country.”

“You and your miserable Milton!”

He looked only slightly surprised and did not correct her. (206)

この時、Sabra は、“Penelope”と呼びかける夫の言葉を文字通りに受け止めてしまう上に、それが小説からの引用であることに気づいたあとも引用元を間違えてしまう。心の通わない夫婦関係を表すかのような噛み合わない会話は、演技をしなければ生きていけない Yancey とそうではない Sabra の立場や生い立ちの違いを示してもいる。

しかし、小説の最後、またしても長年家を離れていた Yancey が、事故で致命傷を負い死にゆく間際に Sabra と再会する場面で、彼女は意図することなく、正しいセリフを発し、夫婦の会話は奇跡的に噛み合うことになる。

His lips moved, He knew her. Even then, dying, he must speak in measured verse.

“‘Wife and mother—you stainless woman—hide me—hide me in your love!’”

She had never heard a line of it. She did not know that this was Peer Gynt, humbled before Solveig. The once magnetic eyes glazed, stared; were eyes no longer.

She closed them, gently. She forgave him everything. Quite simply, all unknowing, she murmured through her tears the very words of Solveig.

“Sleep, my boy, my dearest boy.” (316)

彼女は、引用元を知らないまま自然に同じセリフを発し、この場面において演者として機能する。注目したいのはこれが“all unknowing”に行われる点であり、実は Sabra が町で権威を集めるようになった頃の描写の中に同様の表現“Sabra was, without being fully aware of it, a power that shaped the social aspect of this crude Southwestern town”（下線部筆者、100）がみとめられる。

この、自身に何が起きているのか「無自覚」である、というところに、Sabra というキャラクターの痛ましさやあやうさ、そして現実味がある。その無自覚さ故に、Sabra はある時代の読者に

としては父権主義の人種差別主義者とうつり、別の時代の読者にとっては理想の妻であり母であるようにうつる、といったことが起こり得たのではないだろうか。

最後の場面は、人種的なハンディキャップ故に白人としての演技をしながら生きざるを得なかった Yancey と、Yancey の不在によりシングルマザーとして西部を生き抜くために同じく強く逞しいフロンティア・ウーマンを演じざるを得なかった Sabra が、長年のすれ違いの末にようやくある意味で分かり合い、許し合うシーンとしては感動的であるが、同時に、フロンティア神話の男性主人公と女性主人公の実態が完全なるフィクションであることを示す皮肉の効いたシーンとしても読み解ける。特に Yancey が選んだセリフに入っている“wife and mother”という呼びかけは、Sabra が Yancey の不在を埋め合わせるために払った代償が妻や母として家族の側にいる時間であったことを考えると、より空虚に響く。

これまでに分析した Sabra 像を改めて振り返ると、Ferber は彼女を理想的な女性としてでも、差別主義者の悪役としてでもなく、時代の渦に巻き込まれ、無自覚なまま抑圧する側とされる側の間を行き来しながら生きる一人の女性として描きだしているように思える。Sabra の内にある傲慢さや差別意識だけでなく、その裏に隠された悲しみや孤独なども描き出し、彼女の中で加害者としての側面と被害者としての側面が共存することを矛盾なく自然に描くことで、“Madonna of the Prairie”は生身の女性として読者の前に立ち現れ、やや困惑気味な顔をして私たちに、アメリカのフロンティアとはなんだったのか、といったより大きな問いを投げかけてくる。

注

- 1) *New York Times Books Review* の 1930 年 3 月号の記事では、“Miss Ferber’s Vivid Tale”: “it is a book which one reads once with avidity, for a picture that remains indelible” と評された。
- 2) Elyse Vigiletti も“Edna Ferber and the Problems of the Middlebrow”のなかで、Ferber が当時 *Cimarron* の趣旨が理解されていないと感じていたことに触れ、それを彼女の小説が全般的に“middlebrow”のレッテルを貼られてきたことと

関連付けて論じている。

- 3) *Fanny Herself, Show Boat, So Big, Giant* などの作品の女性キャラクターは Ferber と家族構成や出自、経歴や思想などにおいて通じるものがあるとされる。同時に、*Cimarron* の Sabra もまた、新聞記者であるという職業は Ferber と共通している。
- 4) Ferber の小説とそれをもとに映画化された作品については、本作で度々引用する Smyth の *Edna Ferber's Hollywood: American Fictions of Gender, Race and History* のほかにも、Jane Hendler の *Best-Sellers and Their Film Adaptations in Postwar America* でも分析されている。Hendler の著書では *Cimarron* は言及はされるものの、*Giant* の分析が主になっている。
- 5) Yancey の人種をめぐる多くの議論があるが、Smyth は、“Yancey Cravat is a mixed-blood Native American” (121) と断定した上で論を進めている。小説の中では、Yancey がネイティブ・アメリカン特有の “blood-curdling gobble” (104) を発する場面があり、Yancey がネイティブ・アメリカンだと考える根拠としてここが引き合いに出されることがある。
- 6) Sabra はネイティブ・アメリカンの使用人 Arita Red Feather と、黒人の使用人 Isaiah が恋仲になり、Arita Red Feather が彼の子供を妊娠していることにも出産の日まで気づかないほど、家庭の中で起きていることを把握できていない。

引用文献

- Campbell, Donna. ““Written with a Hard and Ruthless Purpose”: Rose Wilder Lane, Edna Ferber, and Middlebrow Regional Fiction.” *Middlebrow Moderns: Popular American Women*, 1st ed., Northeastern UP, 2003.
- Ferber, Edna. *Cimarron*. 1st ed., Vintage Books, 2014.
- . *A Peculiar Treasure*. 1st ed., Doubleday, 1939.
- Hendler, Jane. *Best-Sellers and Their Film Adaptations in Postwar America*. 1st ed., Lang, 2001.
- McGraw, Eliza. *Edna Ferber's America*. 1st ed., LSUP, 2014.
- Myres, Sandra L. *Westering Women and the Frontier Experience, 1800-1915. Histories of the American Frontier*. 1st ed., Albuquerque U of New Mexico P, 1982.
- Phelps, William Lyon. “On American Books of 1931.” *McClure Newspaper Syndicate for Release*, 29 November 1931.
- Smyth, Jennifer E. *Edna Ferber's Hollywood: American Fictions of Gender, Race and History*, 1st ed., Texas UP, 2010.
- Vigiletti, Elyse. “Edna Ferber and the Problems of the Middlebrow.” *Studies in the Novel* 48.1, 2016, pp. 65-85.
- Zink, Amanda. “Peyote in the Kitchen: Gendered Identities and Imperial Domesticity in Edna Ferber's *Cimarron*.” *Western American Literature* 47.1, 2012, pp. 66-89.

Uncovering the True Nature of “Madonna of the Prairie”: An Analysis of the Female Protagonist of Edna Ferber’s *Cimarron*

Karen NISHIOKA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Edna Ferber’s *Cimarron* (1930) was initially received as a romance that revolves around “Madonna of the Prairie,” the white women who supported the settlement of the American frontier, and was financially successful when it was published. However, given the author’s claim that *Cimarron* was written with a “hard and ruthless purpose,” this novel is in fact full of irony with regards to the myths surrounding the American frontier. This can be seen from the representation of the heroine Sabra. As Ferber is known to portray female characters who express love and empathy for marginalized people in a favorable light, it is unusual for her to distance herself from Sabra and portray her critically in this work. In this paper, I analyze Sabra by focusing on her husband’s absence, changes in her roles, what she gained and lost within that change, and performance, for the purpose of uncovering the true nature of “Madonna of the Prairie.”

Keywords: american literature, frontier myth, female protagonist